

トルコ(1) 親日だが知日ではない国トルコ

須賀 努

コラムニスト・アジアンウオッチャー

これまでアジアをほっつき歩いてきたが、そのキーワードはお茶だった。「トルコは世界で茶葉生産量が5番目に多い国」と聞いて、意外に思う。同時に「街中でチャイを飲んでいるぞ」と言われるとどうしても行ってみたいくなり、とうとう行ってしまった。

アジアではなかったトルコ

イスタンブールに着いた途端、「これは間違いだった」と気が付いた。トルコも西アジア、また部分的にはアジアがあるに違いないと思い、アジアほっつき歩きで来てみたものの、ここにはほとんどアジア的要素はなかった。イスタンブールの石畳みなど一部はヨーロッパ的、モスクは中東的、そして人々の顔や姿は欧米人、中東人、など様々に混在していた。

トルコ人に言わせれば「トルコはヨーロッパでもなく、中東でもなく、アジアでもない。トルコはトルコだ」と。如何にも大国オスマントルコの誇りを持った言い分だ。イスタンブールのオフィス街を歩いていると、モスクから大音声のお祈りが聞こえる中、トルコ人女性がミニスカートでタバコをふかしているのを見た。本当にここはイスラム教国なのか、と実に不思議な気分になる。



写真1
イスタンブール ヨーロッパ側とアジア側を渡るフェリー

チャイナタウンのないイスタンブール

国際都市イスタンブール、さぞや中国人もいるのだろうと勝手に思っていたが、何とチャイナタウンはなく、中華料理店を探したが殆ど発見できなかった。今でこそ観光客は大勢来るが、トルコ人は中国人にあまりいい印象を持っているようには見えない。「我が同胞をいじめている」、あるトルコ人はこう表現する。同胞とは新疆ウイグル自治区などに住む同じトルコ系のウイグル人を指すのは明白だ。

中国はトルコへの投資でも苦戦しているという。ただ中国の経済力が増大するにつれ、トルコ政府も中国を無視できなくなってきており、少しずつプロジェクトを受注しているとの話もある。2012年4月にはエルドアン首相が中国を訪問している。ただその際、新疆ウイグルのウルムチも訪問し、同胞への敬意も忘れていない。ウルムチで出会ったウイグル人はトルコ首相の来訪を「涙が出るほど嬉しかった」と語った。今ウルムチではトルコファッションが流行している。

「これからはウイグル人が間に入り、中国とトルコのビジネスが進むのではないか」と予測する向きもある。実際筆者もトルコの国費留学生とアンカラで会ったが、彼はトルファン出身のウイグル人だった。

戦友韓国は強い

中国が苦戦する中、韓国勢はここでも元気だ。2001年のトルコ経済危機後の回復過程では、地域的に近いヨーロッパ勢が様々な産業でマーケットシェアを取ったが、アジアでは韓国が善戦した。



【須賀努氏のプロフィール】

東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾2年、香港通算9年、北京同5年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

撮影：佐渡多真子

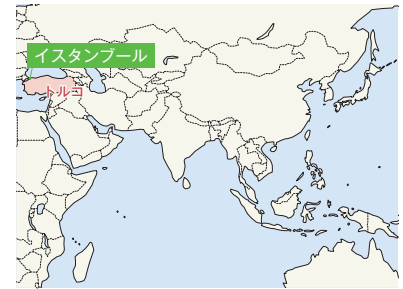


写真2
高級ショッピングモールでも存在感のあるサムソンショップ

「一時はサムソンとLG以外の広告はない、と思うほど広告の銃弾爆撃だった」とイスタンブールに住む日本人は説明してくれた。その成果か、タクシーはフィアットと現代が半々となっており、家電製品もサムソンがある程度のシェアを確保している。携帯もどんどん増えている。

日本ではあまり知られていないが、トルコ人の韓国への国民感情はかなり良い。実は朝鮮戦争時、トルコ軍はNATOの一員として米軍に次ぐ兵士が出兵、韓国軍と共に戦った。まさに戦友だった。トルコ人は勇敢に戦う姿勢を好む。戦友は重視され、韓国勢はそこをうまく利用したといえる。

対日感情は抜群 だが

これほどの親日国は世界にそれほどない、と言われるほど、トルコ人の対日感情は良い。実際筆者がトルコ旅行中も、「日本人」というだけで、非常に親切な対応を何度も受けた。勿論トルコ人は一般的に親切な人が多いそうだが、日本人には格別だ。1890年に起きたエルトゥールル号遭難事件で日本人がトルコ人を救助した話は有名であり、それ以外にも大国ロシアを破った日本、戦後廃墟から奇跡的な復興を遂げた国、として、友好関係は続いている。トルコ人が一番よく知っている日本人は東郷平八郎かもしれない。

だが、現在の日本状況を知っているトルコ人がそ

う多くはない。「トルコは親日だが、知日ではない」と言われたのは印象的。確かに最近の日本の話を振っても、皆あまり反応が無かったのは残念だった。というよりは、これだけの親日国、そして日本製品・技術への信頼性の高い国で、日本を感じる機会は他国より多いとは言えない。それは何故であろうか。

「日本企業はトルコに対する位置付けが中途半端。ヨーロッパに組み込んだり、アジアが管轄したり、突然本社が担当したり。いずれにしても、トルコを商売上の重要拠点とは見ていない証拠」とある関係者は漏らす。最近「中東へのゲートウェイ」との言葉は聞くが、トルコ自身の国内消費力を忘れたかのような対応だ。平均年齢29歳、一人当たりGDPは既に1万ドルを超えているのに、何とも残念な話だ。

一部日本企業は勿論その点に気が付いてきており、製造拠点としてだけでなく販売拠点としての進出も始まっている。金融では3メガバンクが出揃い、現法化を目指す。現在在トルコ日系企業は約120社だが、年々増加傾向にはある。

どのようにして、トルコ市場を開拓するのか。そのカギはやはり宣伝広告ではないだろうか。トルコ人は派手好み、そしてドラマでも時代物、戦闘物が大好きな国民性と聞く。塩野七生さんの「コンスタンチノーブルの陥落」という本を読みながら、ガラタ橋を渡り、ガラタ塔を眺めながら思った。この難攻不落の都市を陥落させた男、スルタンマホメッド2世は日本で言えば織田信長。信長のドラマか映画を作り、そこに日本企業のコマーシャルをタイアップさせればきっと大うけするに違いないと。